

宇部の川と街の変遷 を語りつぐ構造物

ことぶき

寿

はし
橋



宇部の中心市街地を流れる真締川は、源を石仏（現・川上霜降岳）に発し、南に向い宇部港に流れこんでいます。かつて宇部の中心は上宇部で、南には沖ノ山砂丘が広がっていました。真締川が宇部本川と呼ばれたところは樋ノ口（現・山口大学附属病院付近）で西に向かい、鶉の島開削の堤防南側を通り、居能で海に注いでいましたが、豪雨のたびに氾濫し、農地に被害を与えていました。そこで福原純は、寛政9年（1797）に樋ノ口から河口まで開削して宇部本川の流路を付け替え、新川と名付けました。

明治になると宇部の石炭採炭は増大し、新川河口部に宇部港が築かれると、両岸に新たに市街地が形成され、モノ・人が集まる地域になりました。それまで賑わった「上宇部地区」に対して、新市街地は「新川地区」と呼ばれ、「新川地区の間を占める」川から「間占川」となり、転じて「真締川」になったということです。

新川地区の発展は目覚ましく、明治45年宇部村全体の人口は15,750人でしたが、その半数以上が東西新川地区に住んでおり、道路網も新川に集中する傾向を見せました。最初、木橋だった新川橋も明治41年に鉄筋コンクリート橋に、そして昭和12年と、3度架け替えられています。

新川橋・緑橋に続いて、昭和13年（1938）寿橋が架設されました。ここは常盤池からの水を流す塩田川と真締川を続けて渡るうえ、建設費削減のためか川に対し直角に設計されたため、橋の前後で道路線形がやや屈曲するという苦労のあとが見てとれます。親柱のデザインは、巨大な擬和風の御影石製の重厚な造りで、宇部の顔に意識したのかと思わせてくれます。

現在、寿橋の周辺地域は宇部市が管理する真締川公園となっています。個性あふれる彫刻の数々や四季折々の花や木々が中心市街地に豊かな空間を形成しており、市民の憩いの広場として利用されています。

位置図



寿橋 欄干もまた親柱同様の重厚な雰囲気をもつ



市民の憩いの広場「真締川公園」



左岸下流にある塩田川ポンプ場



巨大な擬和風の御影石親柱は重厚な造りで、上部には石灯籠のような笠が載り、ガラス窓のような部材が取り付けられている。(L=33m, b=9.4+2m)